

字占

しかるまじと、まことしやかにこしらへければ、さらばとよろこびて、うりわたしける、その、ちに、くやししくはおぼえける、このことばにつきて二十一のきみ、なに、てか、かひたてまつらん、もとよりしまうのものなればとて、ほうでうのいへにつたはる、からのかゝみをとりにだし、からあやのこそで、一かさねそへわたされけり、十九のきみ、なめならずによるこびて、わがかたにかへり、日ごろのしまうかなひぬ、此かゝみのぬしになりぬと、よろこびけるぞおろかなる、
 〔鹽尻 二十五〕異邦、拆字を以て吉凶を説を相字と云、瑞桂堂暇録、及び高文虎蓼花洲間録等の小説に見えたり、我國、今花押を相して吉凶を云は、もと相字より起れり、賢按、是今世墨色考。
 〔隨意錄 四〕聞、我方京師、昔有字。占。翁者、使人隨意書一字、相之以善占其吉凶禍福、予田虎、伯兄兵馬、嘗善其字占、屢能善中、其人事、頃讀宋高文虎蓼花洲間録云、謝石成都人、宣和間至京師、以相字言人禍福、求相者隨意書一字、即就其字、離拆而言、無不奇中者、名聞九重、上皇因書一朝字、令中貴人持往試之、石見字、即端視中貴人、曰、此非觀察所書也、然謝石賤術、今日遭遇、即因此字、點配遠行、亦此字也、但未敢遽言之耳、中貴人愕然、且謂之曰、但有所據、盡言無懼也、石以手加額曰、朝字離之、爲十月十日字、非此月此日所生之天人、當誰書也、一座盡驚、中貴馳奏、翌日召至後苑、令左右及宮嬪書字示之、皆據字論說禍福、俱有精理云々、

〔闇の曙 上〕字。畫。の。占。といふは、百家名書といふ書の中に、謝氏が相字法と云書有、其占ひ様は、占を乞來る人に、何といふ字にても、向ふの人のおもひ出の字をか、せ、其字の偏傍又は踏冠を或は増或は減じ、種々活を用て、それ〴〵に判斷するなり、占ひし例は、書に詳に見へたり、

按するに、此事も、ふるく我朝に傳へ翫びしにや、雜々拾遺などにも見へたる雜占なり、

〔難波江 七下〕墨色 拆字 相印字 測手板 破字 相笏 相字

相字破字の疑は、もと陰陽五行家のいひいでたることにて、西土より傳播したることは、いふも